

# 翻刻『俳諧歳時記』(十二)

播本眞一

## はじめに

本稿は、「翻刻『俳諧歳時記』(一)」「同(十二)」に  
続き、曲亭馬琴(一七六七—一八四八)が享和三年(一八〇  
三)に刊行した『俳諧歳時記』(二卷二冊、横本)を翻刻す  
るものである。今回は紙幅の都合で、下冊「秋之部」二百四  
丁オモテ十三行目から「冬之部」二百二十四丁ウラ四行目ま  
でを対象とした。凡例などは前記拙稿(一)を参照してい  
ただきたい。

## 『俳諧歳時記』翻刻

俳諧歳時記秋之部 江戸 曲亭主人纂輯

鳴滝祭 廿八日 鎮守の社、洛西仁和寺の西北、鳴滝にあり。

諸神記に云(王城の守護三十番神右白虎の八神)、高雄の林、  
鳴滝川の辺にこれを封ず。西朱雀より西洞院に至りて九町の  
擁護神也。『雍州府志』に云、福王子の宮は、西山鳴滝村に  
有。是のこの辺の地主の神にして、仁和寺の鎮守とす。両社と  
もニ、土人本居神として、同日(二百四オ)に合せ祭る敷。  
又云、鳴滝福王寺、九月二十五日。神輿一基、鉾五本、御室  
の御所の庭に入る、云云。福王子祭 廿八日 是も鳴滝祭  
也。福王子の宮は、西山鳴滝にあり。班子皇后を祭る。皇后  
は、桓武帝の孫女にして、吏部尚書仲野親王の女也。光孝  
帝、立て皇后とす。宇多帝の母なり。この辺の地主神として、  
仁和寺の鎮守とす。毎年九月廿八日、これを祭る。『雑談抄』  
に、俗に五器洗といふ。これ一年中の諸社の祭礼の終りにて  
あれば也。『毛吹草』に、鳴滝祭廿八日と記す。近來の諸抄、  
外に福王子祭と並載たり。是同社の祭を誤りて、再び出す  
敷。住吉の神送り 晦日 九月晦日、摂州住吉の神輿、玉

出嶋の仮殿へ渡御。則ち祓を修す。これを住吉の御宮の祓といふ。祝詞あり。又北祭と称す。出雲石といふ所に、禰宜出雲を遙拜す。これを神送りといふ。今日、四天王寺石の鳥居の辺にも、又神送りあり。大坂所々の神社もまた、神送りの神事あり。野の宮の別(二百四ウ) 山城国葛野郡小倉山の下椿原にあり。いにしへ伊勢の齋宮、はじめ先此所に栖給ふ。よりにて伊勢太神宮を勧請す。この所、嵯峨野也。故に野の宮と称す。○凡、齋宮の親王定畢りて、宮城の内便りよき所を卜して、初齋院とし、祓禊して則ち入る。明年七月に至りて、この院に齋す。更に城外の淨野を卜し、野宮を造り、八月吉日を卜定して、河に臨て祓禊し、則ち野宮に入。「神祇式」野の宮の別れとは、齋宮こゝに籠らせ給ふて三年めの九月、伊勢へ参り給ふ時、天子へ御いとま乞に参内し給ふ也。この時、天子てづから、由豆の爪櫛を齋宮の御頭へさし給ふ也。これをわかれの櫛と申とぞ。是よりして伊勢齋宮へ移り給ふ也。故に野の宮の別といふ也へこの爪櫛は、素盞鳥尊の稲田姫にかつけ給ひし因縁を以、齋宮にかつけ給ふとぞ。『日本(書)紀』第四に、崇神天皇六年、天照御神を豊鍬入姫の命に託して、大和の笠縫の邑に祭り給ふ。同書八に、垂仁天皇廿五年三月、天照太神を豊鍬入姫の命に離れ倭姫の命に託し給ふ。同書七に、景行天皇廿二年二月、五百野皇女を遣して、天照太神を祭らしむ。いにしへ(二百五オ)三代、此の如くなるゆゑに、代々皇女を伊勢太神へ奉り、みやつか

へさせ給ふ也。天皇即位のち、内親王の内妃女をえらみ、太神宮の御給仕と定給ふ。これを卜定といふ。内親王なきときは、諸王の姫宮を卜定する例あり。いづれにても、定得て、二年めの八月より翌年の九月まで、野の宮にまします。この間、三度の神事、三度の祓あり。桂河の御祓 桂川は山城国葛野郡にあり。大堰川の末也。河の西に桂の里あり。故に嵯峨以南に至りて今桂川と称す。元葛野川といへるか。上鳥羽小枝川の南に至りて淀川と合す。凡、齋宮の群行は九月十七日也。前日桂川に於て祓禊を修し給ふ。これを桂川の御祓といふ。伊勢御遷宮 凡、大社造り替毎に陣の義ありて、時日を定らる。勅使あり。伊勢太神宮、春日の社、廿一年を経るときは必造替あり。遷宮の時、納る所の神宝、行事官、調進す。この月、伊勢参宮の人、多く京師を出て、十六日の御祭会、并に御遷宮にあはんとす。凡、参宮の人(二百五ウ)先づ靈山の国阿の像に詣で、その杖履を載拜す。相伝ふ、国阿深く太神宮を信じ、時々木履を穿、杖を携て参詣をなす。終に行路の難なし。故にその福に做ふて、以平安を祈る也。○廿一年毎に遷宮あるがゆゑに、十五年めに至るとき、木割のことあり。三年にして木挽成りて、又三年木揃のことあり。材木は木曾山、并に紀州大杉山より出す。○内宮御鎮座は、垂仁天皇二十五年三月也。外宮は、内宮鎮座の後、四百八十四年を経て、雄略帝の時、御鎮座也。虫撰

『年中行事歌合』『増山の井』等、さかの、虫撰九月の部に

出すこと勿論也。只虫えらみいふときは、七八月の間をもちふべし。今旧きによりて再びこゝに出す。爵入大水すいめいなる為始はつ

〔月令〕 豺おしかみけもの 獸を祭る 〔月令〕 鯉魚風りぎよふう 九月の風也。

李賀が詩に、門前流水江陵道、鯉魚風起芙蓉老 〔五雜組〕

いろなき風 九月の風也。『新古今（和歌）集』久我内大臣、

物おもへは色なき（二百六オ）風もなかりけり身にこゝろしいの秋

のこゝろならひに。菊 〔月令〕に曰、菊に黄花ありと。

黄は天地の正色也。凡、花皆色を以名つけずして、独菊、

黄花を以す。亦、その揺落の候に当りて、独造化の正を得

たり。然れども、世人奇を好みて、毎に緋なるもの、黒きもの、

白きもの、紫なる者を以貴しとす。黄に至りては則尋常じょうじょう

に是を見る。〔五雜組〕菊、本鞠たぶに作る。鞠は窮也。〔陸佃

埤雅〕四声字苑に云、菊は拳竹反、本草注に云、云云。和名

加波良与毛木。一に云、可波良於波岐。俗にいふ本音之重、

日精草也。〔和名抄〕 百夜草 〔藻汐〕 〔蔵玉〕 星見草

〔古今集〕 〔蔵玉抄〕 はつみ草 〔蔵玉〕 冬によめり。是冬

菊なり。金草 〔蔵玉〕 人丸歌 かたみ草 〔蔵玉抄〕

霜見草 〔藻汐草〕 菊の淵 〔古今〕 着綿 前に見えたり。

千代見草 齡草 ふたつともよほのに慈童が古事より名つけ

（二百六ウ）たるにや。○山路草、乙女草、手馴草、花の主、

のこり草、菊花、花の菊、百菊、狸々菊、金菊、酔楊菊、大

白、金目貫、大般若、翁草、女花、隠君子 鞠花 〔蔵玉〕

秋無草 〔蔵玉〕 冬さくなり。 秋の花 菊をいふといふ説

あり。不審也。歌の体によるべきよし『藻汐草』にいへり。

いなて草 〔藻汐草〕 秋しくの花 菊の字、秋しくとよ

むと『藻汐草』にあれと覚束なし。契草 〔蔵玉〕 蘇我

菊 〔奥義抄〕に云、そが菊は黄菊なり。承和帝は、よろづに

物の黄なるを愛給ふて、菊に黄なるを愛し給ひける也。されば、

承和菊とは黄なるをいふ也。或物に一本菊を云よしいへり。

宗祇説に、そがひに見ゆるとは、まほならぬ人をいふと。し

からは、花の行義もなく、あなたこなたへ向たるにや。一説

に背向と書よしいへり。『八雲御抄』に、そがひとは筋違也

としるし給へり。『拾遺（和歌）集』雜、よみ（二百七オ）

人しらず、かのみゆる池辺にたてるそか菊のしけみさえたの

色のでこらさ。しけみさえたは、繁き小枝也。いろのでこら

さは、色のでりこきさまをいへり。承和の色 〔藻汐草〕

に、唐にて菊をもてはやせるは陶淵明に始り、我朝にては承

和帝（仁明天皇）より始めてもてあそび給ひしゆゑに、承和色

と申よし、此ころいまた菊の品も分たれず、只黄なるを用ひ

られしかは、黄菊をさして承和色とも、そか菊とも申とかや、

云云。『藻塩（草）』の説、此のことしといへとも、『類聚国

史』に、桓武帝の菊の御歌を載られたれば、承和帝より菊を

はじめて愛し給ひしにはあらず。只この帝、わきて菊を遊び

給ひしなり。後の歌には多くしら菊を詠り。 残る菊 つね

には九日以後の菊をいふ。残菊の宴、十月五日、『公事根源』

に出つ。紅葉 紅葉かつちる かつちるは少しつゝちる也

といへり。又、且の字のこゝろ也と。又一説に、又してはく散る也ともいへり。皆覺束なし。(二百七ウ) 馬琴云、紅葉かつちる、かつは、かつ色見する梅の花などいふかつにおなじく、すぐれて早きこゝろにや。又陸佃が『埤雅』に、茶褐色は黄黒色也といへり。樹々の下枝は早々いろいろづきたるが、雨露のために、はやう黄黒と茶褐色になりてちれるをいふにやあらん。故に、かつちるは秋也。下もみちかつちる山の夕しくれぬれてや独鹿の鳴らん、家隆。家兄羅文云、かつちるは数々ちるにや。すいとつと相通也。古へ、つ、す打まかせて書り。又下枝は、風雨の為に搗て、はやくいろいろのおとふる也。餅をかちんといふも、飯を搗てつくるものなれはいふ也。かち、かつ通じて、搗ちるにやといへり。此説も又ゆるなきにあらず。紅葉衣 表黄、裏蘇枋へ九月より十一月まで。又一説に表裏青。又黄紅葉とは、表黄裏青。又青紅葉は、表青黄裏紅。この外、櫛紅葉、紅葉かさね、蝦手紅葉等、品々あるよし也。紅葉の土器 菊の盃に対しての名なるべし。又、林間煖し酒焚紅葉といふ、白楽天が詩より名つけたるにや。紅葉狩 山路にもみぢをたつめる也。さくら(二百八オ)などいふにおなじ。地榆 又吾亦紅に作る。芒に類せるもの、眞の吾毛紅也といへり。地榆はのこきり草、はこゝろも草と訓ず。本草に云、葉細く長くして鋸齒の形に似たり。七月花を開く。桑椹の如く紫黒色也。鉄槌抄(『鉄槌』に、吾亦紅は藤はかま也といへり。仙蓼 白 英 雪下

紅、又鶴上戸。南天の実 罌子桐の実 菩提子 菩提子 木患子 木藥子 檳榔子 杼の実 老母草の実 梅檀の実 桐油の実 この油に松脂を加へてちやんと名づく。「和二三」 棗の実 椋の実 栗 落栗、毬栗、燒栗、桐栗、茅栗、柴栗、剥栗、打栗、栗の粉餅。出落栗 此栗、必縁を脱して地に落つ、故に名づく。俗に、丹波のて、うち栗といふ是なり。て、うちは出落の訛也。三度栗 越後及ヒ上(二百八ウ)下の野州にあり。小栗也。一年に三度収むといふ。山栗 山栗、さぐくり、柴くり等、みな小栗なり。錐栗 俗にひやうく栗といふ。山栗の円きものにして、尖らざるもの也。搗栗 水煎してその殻を去る。鞍馬村婦、柴栗と称するもの此類也。甲州の打栗は、打ひらめて煎餅の如くす。大栗は、丹波の名産なり。熊栗架を搔 栗の梢に熊の栖をいふ。榛 無花果 和訓、一熟の義也。一月にして熟するの名。「和二三」 唐柿 無花果也。「和二三」 新松子 榎 藤 藤に似て樹に著く。通草の故し。胡桃 呉菜羹、食菜羹は本邦になし。京師にて苗代菜羹と称するもの胡頹子にてひぐみといふ。「大和本草」 仏手柑 このもの昔、本邦になし。近世来る。「大和本草」 仏手柑 仏手柑にて作る酒也。刑子愿、仏手柑を取りて酒に作り、仏香碧と名づく。自馨烈にして奇絶也。しかれ(二百九オ)とも歳すに耐ず。「五雜俎」 柑子 蜜柑 橘といふものはなり。花を花たちばなといふ。「大和本草」 柚 柚味噌

金柑 乳柑 九年母なり。雲州橘 蜜橘に似て薄小也。

〔大和本草〕 水木 熟柿 烏柿 馬櫛 漆取る 色かへぬ

松 野山の錦 草場の錦 山粧ふ 薄ちる 末枯 枯草の

露 破芭蕉 芦の穂繁 豆引 小豆引 緑豆引 一年に二度

引ゆゑに、八重生といふ。〔大和本草〕 豌豆引 『通俗志』

に、豌豆蚕豆引を夏とす。故に五月の部に出せり。しかるに

『増山の井』(俳諧) 新式』に九月に出す。こゝをもて再び

出す。蕎麦苳 新蕎麦 その早き(二百九ウ)ものは七月

収む。その花いまだ終らず。半花半熟する物をえらみ取て、

これを販ぐ。これを新蕎麦といふ。遅稲 晩稲 稲孫田

落し水 露霜 露時雨 霜踏む鹿 冬たるべきを諸抄に秋と

す。委しくは冬の鹿の條下に注す。尾越の鴨 今式に、五

月の間巢をなして、中の尾の先半は白くさして、尾の上へ

こす物也。これを尾越の鴨といふ。馬光の説に、鴨餌に飽て

身重く、高く飛ぶことならず。それゆゑ、山の尾を越て来た

るをいふ。紅葉鮒 江州湖中の鮒、その大なる者を源五郎

鮒と名づく。深秋、その鱗、紅に変ずるを紅葉鮒といふ。

崩魚梁 網代打 網代は冬也。しかれとも九月九日の前より

打そめて、宇治の網代、供御にも奉るにや。『藻塩草』に、

網代は宇治に限らず、田上にもよめるかといへり。水魚を取

らん為の料也。『延喜式』に云、山城(二百十オ) 国、近江

国、水魚網代各一所云云。其水魚、九月より始めて十二月三

十日迄、これを貢ず。しかれば、網代打、一句によりて季を

定むべし。番綿 番船 撰州大坂より江戸へ積出す綿也。

その廻船に一番・二番・三番の名ありて、江戸入津の遅速を

以、損益を定むゆゑに、番綿といふ。赤胡藜 九月野外に

群をなすもの也。秋に後る、秋より後 行秋 暮の秋

秋の暮は秋の夕くれ也。混すべからず。秋の別れ 秋の限

秋の名残 秋を惜む 秋の凄 秋深き 冬を待 冬を隣

秋を隔る 秋過て 九月尽 俳諧歳時記 秋之部 畢

俳諧歳時記 冬之部 江戸 曲亭主人纂輯

〔冬〕 冬は終也。物終に成也。〔积雪〕 冬はひゆなり。ひ

ゆは寒なり。〔日本积雪〕 顛頂 帝 〔月令〕 玄冥 神 〔同書〕 孟冬 〔月令〕

析木 〔礼記 鄭玄注〕 上天 〔爾雅〕 冬的天なり。玄

英 〔月令〕 安寧 〔爾雅〕 羽音 〔月令〕 律檀

檀木の火をとりにて律を改る義にや。『淮南子』に十二月の

木を記す。十月は檀也。『爾雅翼』に云ク、檀は陰木也。

木を記す。十月は檀也。『爾雅翼』に云ク、檀は陰木也。

〔周礼〕に云ク、冬は槐檀の火を取る。

〔十月〕 応鐘 律 〔月令広義〕 立冬 節 霜降の後十五日、

斗乾に建をいふ。小雪 中 立冬の後十五日、斗亥にさ

すをいふ。良月 〔左伝〕(二百十一オ) 陽月 〔爾雅〕

上冬 「元帝纂要」 暢月 「同所」 玄武 「同上」 三冬

「同上」 九冬 「同上」 秦正 「月令広義」 秦は亥の月

を以、正月とす。 小春 「初学記」 初冬 時雨月 初霜月

神無月 『奥義抄』に、この月、諸神、出雲の大社に集り

給ふ故に名づくるとあり。『つれく草』には、此月、大神宮

の御許へ諸神あつまり給ふ故に名づくるといへり。又、貞治

のころ、藤沢山の沙門由阿が『万葉集』の注をして『詞林采

葉抄』といふ。その中に、一天下の神無月をば、出雲国には

神在月とも神月とも申也。是、諸神の参りあつまり給ふ故也。

その神在の浦に、神々来臨の時に、童の作れるが如き篠舟、

波の上に浮ぶこと数もしらず。諸神はかの浦の神在の社に集

り給ひて、大社へ参り給はず。神在の社は、不卦山といふ所

に立給ふ。佐太大明神と申也。是則、伝奏の神にてまします、

云云。この説、異端に近し。たとひ出雲にしかることありと

も、一天下のうち、何ぞ神なしといふ月あらんや。荷田東磨

(二百十一ウ) 翁の説に、神無月は無雷月也。十月は純陰

の月なれば、雷の声、収りはつるゆゑにいふ也。六月を雷鳴

月といふに對せりと。これ古人未発の論也。安藤為章の『年

山紀聞』に云、十月を雷無月といふことは『万葉集』第十三

の歌に、霹靂の日香天之九月の鐘礼乃落者といふ歌あり。

『月令』に、仲秋の月、雷始めて声を収とあれど、それは大

かたの事にて、右の歌には九月をさへよめり。されは、十月

に至りて雷の声収りはつる故に、雷無月といふなるへし。

雷を神とのみいふことは『万葉(集)』に、神の如聞つる滝

とよめるも、『後撰(和歌)集』に、ちはやふる神にもあら

ぬ我中の雲るはるかになりも行哉、と詠るも、雷神也。又

『伊勢物語』に、神さへいみしうなり、云云。又云、神なる

さわぎに云云。此外、証歌多し。考へて知べし。かゝれば前

の、出雲に諸神の参り集り給ふなどいふ、附会の説也。思ふ

に、此月諸神の祭礼なき故に、かゝる説をさへ設たるなるべ

し。更衣 朔日 孟冬の句 「公事根源」 句の説、くはし

く前に出たり。(二百十二オ) 氷魚を賜ふ 「公事根源」 更衣

の節会に、三献のうちに氷魚を賜ふ。 神送り 朔日 住吉

の神送りは九月晦日なり。 燂槽を食ふ 朔日 峽人、十

月朔日に多く蒸裏を作りて節物(と)す。 荆楚の人、多く燂

槽を食ひ、或は糖となす。 「事文類聚」 拝墳 一日 「夢華

録」 「程子遺書」 京師の人、十月朔日墳に詣で、以饗養をな

すなり。 炉ひらき 朔日 炉炭を進る 「事文」 燂炉会

「歳時雜記」 「夢花録」 共に炉炭のこと也。 亥猪 亥日

るこの餅 初冬 その月、亥に建す、亥の日、亥の刻、餅

を食らへは病なし。 「太平御覽」 開化天皇十年十月、但馬国

ヨリ初めて餅を献す。 「類聚国史」 是、るこの餅の始か。

『錦繡万花谷』に、この餅を食へは万病を除く。 ○豕は多子

なる者也。 毎年十二子を生。 閏年には十三子を生むゆへに、

婦人これを養て、此日に至り餅を供じて神を祈る。 「政事要

略」 「四季物語」 「下学集」 等に詳也。 ○『日本(書)紀』

崇峻天皇十月四日（二百十二ウ）山猪を献ず。又、太子伝、冬十月、山猪を献ずる者あり、三云。これらや亥猪と名つくるの始ならむ。○ゐのこのこと、その始詳ならずといへとも、『延喜式』にも載られたれば、ふるくよりあること也。○天元元年十月はじめのゐの日、右大臣の女御の火桶に、もちひくだものもりて、内裏の女房につかはす。大臣、此火をけ一つ、奉らせ給ふ。しろかねして、井のこ・かめのかたを作りすゑさせ給へり。くはられたる歌、井のこの歌は、平の兼盛が家の集にあり。わたつみのうきたる山をおふよりはうごきなき世をいたゞげや亀。「源順歌集」このころより、初亥の日を祝し給へるにや。火桶に餅くだものもりてとあれば、火桶は檜桶ならんか。又は火桶にて、この日爐をひらくこと、古くよりありしにや。又『源氏物語』葵の巻に、その世さり、ゐのこのもちひまいらせたり。君みなこのかたに出たまひて、維光めして、此もちひ、かうかすくゝに所せきさまにはあらで、あすのくれにまいらせよ。これ光、ねのこはいくつ、つかうまつらすべう侍らん、とまめだちてまうせは、みつが一つにてもあらんかし、とのたまふに、こゝろえはて、たちぬ。ゐのこのあすを子のことともいふにや。○亥の子の餅は七種の（二百十三オ）粉を合せてつくる。大豆、小豆、大角豆、胡麻、粟、柿、糟也。正親町公通卿の抄、并に、『御湯殿（上日）記』等に、その式、委しく見えたり。○一説に、摂州能勢郡木代村に門太夫といふ者住せり。その家、代々亥の子の

餅を貢ず。その先、神宮皇后に起れり。むかし此所、及ヒ切佃大丸の近里は山城八幡の神領たり。よりて、今善法寺よりこれを捧といへり。達磨忌 五日 南天竺香至王の子鯨鯛氏と号す。普通元年、梁に入る。武帝契はず。江を涉て魏に入り、嵩山に居る。九白（九年なり）を経て、西域に帰る。梁の大道二年十月五日、入寂。代宗、諡して円覚大師と号す。射場始 天子、弓場殿に出御ありて、公卿以下の射芸を御覧ある也。『先代旧事本記』に三日とす。『公事根源』これにおなじ。『江（家）次第』に、十月五日射場始。注に、藏人式七日也。五日は残菊の宴によりて也。残菊の宴 五日 群臣、詩を作り、酒を給ふこと、重陽におなじ。○延暦十六年十月、曲宴あり。酒酣にして皇帝（桓武）歌て曰、三云。「類聚国史」是、始也。十夜 五日より十六日迄「雍州府志」○洛東、鈴声（二百十三ウ）山真正極楽寺真如堂（天台）を以、始とす。本尊、慈覚大師の作也。この像の靈験によりて、別時念仏を始む。これを十夜といふ。蓋、伊勢守貞国はじめてこれを修す。興福寺法花会 九月晦日より七ヶ日の間、南田堂にて妙法の大会をひらかしむ。これは十月六日、長岡の大臣内膳の御忌日によりて也。閑院贈大政大臣冬嗣公は、かの大正の御子たるによりて、父の御為に始て行せ給へるにや。六日に此会を行るゝ也。「公事根源」維摩会 十日より十六日迄 南都興福寺に於て、これを修す。大織冠の忌日によりて也。『故事要略』に云、慶雲二年、

正一位大政大臣、聖廟安穩、社稷傾覆なき爲に、この会をひらく。○斉明天皇三年十月、内臣鎌子、山階寺を建、維摩会を修す。山州陶原の家に於て、山階精舍を創め、維摩会を設く。維摩会、是始也。「元亨釈書」 金毘羅祭 十日 讚州鶴足郡にあり。祭る神一座。或はいふ三輪大明神、或はいふ素盞鳥尊。当山の形、象の頭に似たり。故に象頭山と号す。開基 詳ならず。(二百十四オ) 一説に、伝教大師、入唐帰朝の日、金毘羅神を勧請すと。禁より碓 十八町、悉く石階、嶮岨也。又、崇徳院の廟を以、世に金毘羅大権現と称す。合せ祭るゆゑ歟。○京、安井親性寺に崇徳院の社あり。金毘羅の社と称す。八月廿六日祭礼也。芭蕉忌 十二日 芭蕉庵桃青は伊賀の人、松尾氏。後、江戸に居して、俳諧に名あり。元禄七年十月十二日、痢疾を患ひて難波の旅亭に没す。其角・去来・丈艸等、空骸を送りて、大津の義仲寺に葬る。晋子、終焉の記を作りて枯尾花集(「枯尾花」といふ。伝記、許六が『歴代』滑稽伝、及ヒ『風俗文選』作者列伝等に 詳也。近世俳諧者流、この日筵をひらきて連歌興行す。故に今爰に略記す。御影供 十三日 又御命講、或は会式と称す。日蓮上人の忌日也。春の弘法忌を御影供といふに紛るゝ故、おめいこうといふ。えとめと通ず。影、読て、めいとすのみ。日蓮上人は房州の人、三国氏。弘安五年十月十三日寂す。年六十一。後醍醐天皇、勅して大菩薩の号を贈らる。蓋、洛北妙頭寺(二百十四ウ)の妙実、一雨を祈

るの賞に因て也。「註面贊」昨今、宗門の徒、仏壇を掃除し、紙製の造り花を挿み、五色の餅を供す。この節、時として風烈し。これを後命講荒といふ。菊鶏頭剪尽しけり御命講、はせを。 下元の日 十五日 正月上元、七月中元、十月下元これを天慶月といふ。「潜確類書」道経に、正月望を以、上元とし、七月望を以、中元とし、十月望を以、下元とす。遂に三元三官大帝の称あり。これ俗妄の甚しき也、二云云。「五雜俎」 水官厄を解す 三元の日、水官、人の罪福を天に告「事林広記」 聖一忌 十七日 洛東福寺の開山忌也。今日、方丈に什物をかざり、午後、聖一の像を腰輿に乗せて、寺僧前後に随従し、経堂の須弥壇に安置す。 弁当納 前におなじ。京師の人、昨今兩日の会日を、年中遊山の終りとする故に、弁当納といふ。 御取越 一向宗門の徒、此月親鸞上人忌を修す。忌日は十一月なる故に御取越といふ也。水滸にまこと見せけり御取越、はせを。(二百十五オ) 夷講 廿日 この月廿日、或は家例によりて日定らず。商賈(家)の徒、西宮大神宮を祭る。此神、商賈を護り給ふゆゑ也。この日、蛭子の像に神饌・神酒等供す。亦かならず鯛を供する也。又別に酒宴を設けて、年中出入りする所の花主、或は懇意の人を招きて饗応す。これを誓文払といふ。又、蛭子の像前におゐて、賓主相混じ、盃盤器物に至るまで、仮りに佃を定む。或は千両、或は万両。売る者、諾するときは必拍掌す。これを夷講の売買といふ。一時、酒興の戯也。ふり売の鴈あ



はれ也夷講、はせを。 舊文私 廿日 宮者殿と号す。京極、  
四条通りに鎮座。祭る神つまびらかならず。 法勝寺大  
乗会 廿四日より廿八日まで 当寺は、白河法皇の皇居。そ  
の後、天台宗の住持聖道衣也。後醍醐帝の勅によりて、律衣  
となる。今、寺絶て岡崎村の藪中に諸堂の跡残る。九重の塔  
の跡、村の南にあり。塔檀と号す。糸桜の名所也。『風雅集』  
浄妙寺閑白、立よらて過ぬと思へ（二百十五ウ）と糸桜心  
かゝる春の木のもと。一説に、当寺は南禅寺の西北、新黒谷  
の南也。この地は白川大臣忠仁公の別業にして、寺は白河院  
の御願也。当寺の九重の塔、浪速の浦にうつりしといふ。  
大社の神事 十一日より十七日まで 大社杵築大神宮は、出  
雲国神門郡杵築村にあり。祭る神、大己貴尊。孝安天皇三十  
二年、垂跡。昔は宝殿高サ三十丈、今減じて八丈。後深草  
院、宝治元年八月廿五日建立。三条院、応保元年、始て三月  
会を行はる。『和漢義』毎年神祭七十二度。就中、十月は殊  
に深秘の祭といふ。凡、十月十一日より十七日までを齋と称  
す。この間、風烈しく波あらき日、一蛇化度し、藻に乗て  
海浜に浮む。人これを見れば、はやく国造へ訴ふ。その人に  
褒賞あり。この龍蛇を曲物に盛りて、神殿に納むといふ。  
その蛇の形、蟻蛇に似て、錢形の斑文連り、五色の彩色画  
るが如し。尾先は魚尾に似て岐なく、屈曲して宇賀神の如  
し。神祭第一とするものなり。 口切 茶壺の口はやく切れ  
は風味を失ふ（二百十六オ）ゆゑに、この節切る也。口切

（炬開）や汝をよぶは金の事、其角。古時の茶は煮といひ、  
煎といひ、煎といふ。須らく、湯は蟹眼なるべし。茶味方に  
中す、云云。『五雜俎』茶の上品なるもの、龍團、雀舌の名  
あり。宋の初、團茶を製す。名香を用て蒸して以て餅となす。  
凡、茶を賞する事、唐より始まる。陸鴻漸、はじめて茶法を  
定む。○陸羽云く、茶その名、五あり。一に茶、二に檜、三  
設、四に茗、五に筴。『因話録』本朝、茶を遊ぶこと、足利  
將軍義満・義政、相統て甚これ嗜む。或はいふ、義満卿、  
大内義弘に命じて、茶を宇治に植。その後、宇治を以、上品  
とす。近世、紹鷗・利休、茶法に名あり。或はその亭を數  
寄屋といひ、又團と称す。『和名抄』に茶茗。爾雅集注に、  
茶は它加の反、字亦掾に作る、云云。今呼て、早く採るを茶  
とし、晚くとるを茗とす。音酪、云云。かゝれば茶にはたへ  
て和名はなき也。又『呉志』に云、孫皓の時、茶碁を賜ふて  
以酒に当とあれば、和漢ともに、茶はふるくよりあると見ゆ。  
初霜 又、早霜 亦、靄、（二百十六ウ）初霜消る、霜の花、  
霜たゞみ、霜の劍、霜の袴。霜崩れ「藻汐」 霜折レ「同  
書」 靄女「淮南子」雪霜を守る神の名なり。 さはひこ  
め 霜をいふ也。『秘蔵抄』、さはひこめおくわか宿のませの  
うちにかはらよもきのかたく枯れぬる。○霜は秋の半より降  
るものなれば、秋の詞人たらは秋たるべし。但、霜とばかり、  
初霜も冬也。 時雨 亦霖雨 和名之久礼。「和名抄」 初  
霖雨 村しくれ ぶりみふらずみするをいふ。暴霖雨なり。

泪なみだのしぐれ 袖そでしぐれ 袖時雨そでときりもなみだ也。 川音の時雨

松風のしぐれ 川音松風の声を、霰雨ししぐれかとうたがふなり。 誠の霰雨にあらす。 詩に、落葉を雨と疑ふなどいふはつね也。 この二つ、夜分のころえありて作るべし。 李時珍云、立冬の後十日を入液とし、小雪に至りて出液とす。 又霰雨といふ。 百虫これを飲み皆伏蟄し、来春に至り、雷鳴かみなりて出る也。 しからは、此方にて(二百十七オ) しぐれといふものは液雨也。

『和名鈔』に霰雨ししゅうをしぐれと訓す。 霰雨は小雨也。 又『爾雅』に云、時雨ししぐれこれを澍雨といふ。 しかれとも、此方にいふしぐれのことにあらず。 初雪 初雪消る 初雪の見参 むかし初雪の降る日、群臣参内するを、初雪の見参と申也。 桓武天皇、延暦十一年十一月よりはじまる。 初雪に限らず、深雪の時ときは必、諸陣見参をする也。 このこと絶て久し。 『公事根源』在五中將の云い高たか(喬)の皇子みこを訪とむらひ奉りて、雪ふみ分て君をみんとはと云いしも、深雪の見参といふべきにや。 初氷 初氷解る 氷はひゆる、氷はこる也。 『日本積名』 冬牡丹

八月より葉出て、十月より花ひらく。 臘寒猶花あり。 『大和本草』 大萼の花 俗につはぶきといふ。 欸冬くわんとうなり。 又、杜衡とこうを以、つはぶきとするものあり。 『本草綱目』 欸冬くわんとう花の條下に云、一名藜吾。 蘇頌云、欸冬又、紅花の者あり。 葉荷はせの如くにして、その大なるもの一舛ひらを入る。 小なるもの数合あに入る。 俗呼よびて蜂斗葉ほうとうとす。 又水斗(二百十七ウ) 葉と名づく。 蘇恭そこうか所謂、大サ葵おほいの如くにして叢生そうせいす、といふものは

也。 急就草に云、藜吾は欸冬に似て腹に糸あり。 陸地りくちに生す。 花、黄色也。 この両物、この方にいふ、つはぶきに似たり。

又『和名鈔』に云、欸冬。 『本草(綱目)』に云、一名は虎鬚、和名夜未やまふき木、一云、夜未布木。 『万葉集』に云、山吹花とあれど、今山吹と称するものは茶藤花也。 欸冬の葉、落に似たれば、昔は山ぶきといひしを、後に、つは、或は、つはぶきなど名つけたるなるべし。 寒菊 小花ひらく。 花の大なる者は希也。 京師尤よろし。 八手の花 『和漢三才図會』

に、五六月に白花開クといふ者は別種也。 『大和本草』に出たる者、是也。 正字 詳ならず。 茶の花 本朝、茶を植るの地多し。 その内、山城宇治を以第一とす。 駿州阿部川、近世又、遠州の山中、多くこれを栽。 伊勢、近江、肥前、筑前等、各その地によりてその名を称す。 山茶花 その葉、飲となすべし。 故に茶の名あり。 麦藁 大抵、小雪前後を候とす。 寒梅 寒梅は八重(二百十八オ)なり、香なし。

九月に花ひらく。 梅のいとはやきもの也。 浅香山、これに次てはやく開く。 ひとへの紅梅也。 凡、冬至より前にひらくを早梅といふ。 『篤信花譜』 帰り花 正花也。 花の座を持。

水仙花 単葉なるもの、その中一酒盞あり。 深黄にして金色なるを金盞銀台といふ。 千葉なる者、是を玉玲瓏といふ。 『本草』 『活法』 湯夷華陰の人、水仙花すいせん八石を服して水仙すいせんとなすことを得たりといふことあり。 枇杷ひはの花 槐花くわい黄て、挙子忙たり。 枇杷黄ひばて医者忙たり。 『五雜俎』 散紅葉 名

の草枯る、花の字色の字結びて秋なり。「御傘」 颯 風、木上を過るを颯といふ。「字彙」或は木枯に作る。冬時の疾風なり。又俗、凧に作る。本朝の俗字也。音詳ならず。木からしの果はありけり海の音、言水。鶯の子鳴 冬日、鶯、藪中に鳴くものあり。しかれとも正音にあらす。これをさゝ鳴といふ。或は、今春生ずる所の鶯、和暖に感じて声を発すといへり。美にしかるや。さゝ鳴や日なかの里の雪明かり、羅文。(二百十八ウ) 枯尾花 落葉 桜の花 冬椿 枯

柳 兼三冬物

雪 六花 「韓氏外伝」凡、草木の花、多くは五出、雪花独り六出。朱子云ク、地六は水の成数、雪は水結ひて花をなす故に六出。雪吹 雪に風の交る也。玉塵 玉の屑、又同シ。雪をいふ也。雪消 食をとゝのへて寒気を防くを雪けしといふ。はたれ雪 只はたれとばかりも詠り。春の雪をいふといへる説あり。「藻汐草」に、薄太乱と出つ。かたひら雪 たびら雪 夜衣にかけてうすきをいふ。たひらは帷子の略なるよし、雪碇いへり。愚按ずるに、かたひらは片葩なるへし。『五雜俎』に云、雪のいまだ花を成ざるものを今の俗、米粒雪といふ。雨水初て凍て結びなる者と。是、本邦の俗にいふ風花也。惟の和訓かたひらといふも、元片平の意也。しかれば片葩雪は、初冬の雪をいふべし。(二百十九ウ) たひら雪は手平雪にて、雪花手平のごときをいふにや。 雪しまき 『俳諧』御傘』に、ゆきしまきは

時雨と雪と風の交はる也といへれど、北地の人のいふには、雪に颯の交るなり。北国の路徑、もしこれにあへは忽、雪中に凍死す。雪吹倒れ『増山の井』に出たり。雪しまきの類にや。雪作 雪の作らんとする時、雷これに応ずる也。多く北地にあり。雪竿 北越の人、冬月竹竿を路徑に立て、雪の深サをしるるを雪竿といふ。雪やけ 寒氣指を墮といふものは也。雪団 雪軋 雪仏 雪乃布袋 雪連磨 雪燈籠 雪獅子 雪中小兒の戯に、雪をまらばして団となし、或は、雪を束て種々の形を作す。雪礫 雪打 皆雪中の戯なり。雪の山 雪山は雑なり。雪車 轆は禹の泥行せし具也。『史記』にみゆ。○信安、滄、景之間、冬月(二百十九ウ) 作「小床」水上曳之謂之凌床。「沈存中筆談」○秧馬。「東坡集」ともに、此方にいふ雪車の類也。雪車は北越の人、雪中に薪を樵の具也。木を以これを造る。その形、輪なき地車の如し。故に雪車の名あるか。山中樵る所の薪を雪車に積み、山下にこれを軋下し、平地に至りてこれを引く。則、右足を以これをやる。船の櫂の如し。其雪車をやる時は必ス鄙歌をうたふ。これを雪車歌といふ。漸その家に近づくと、妻子その雪車歌を聞て、夫の帰れるを知り、出迎へたすけて家に至らしむ。その唱歌、鄙曲といへとも、甚感哀を生ず。北地の人の辛苦いふべからず。近來雪車の句作あるをみるに、多くは雪車に乗るといふ。雪車は薪を積のみ、人の乗

ありく物にはあらず。『史記』『太平記』の轆には乗るべし。

綱貫 北地の人、雪中用るところの草鞋なり。雪履 雪

女 山中、積雪凝て気をなす者 雪蛆 蜀の峨眉山、夏

積雪中、雪蛆あり。「五雜組」雪蛆は夏也。今、類を以こ、

に出せり。雪の肌 美人にいふ所にせものなり。(二百二

十才)富士の雪 『俳諧』御傘』には『万葉(集)』の、不

二の峯にふりおく雪はみな月の望にけぬれはその夜ふりけり、

といふ歌を引て糺とす。『俳諧』無言抄』には、赤人の田子

の浦の歌、『新古今(和歌集)』冬の部に入たりとて冬とす。

畢竟、一句によりて季を定むべし。霜 鶯管山の霜、紫

を染べし。「湘潭記」催は霜の白き者也。「説文」又、玄霜あ

り。水 水の轄 「八雲御抄」「藻汐草」凍閉るをいふ。

薄氷 氷柱 垂氷 氷柱、垂氷おなじものなから、歌には

垂氷とのみ詠り。簷下霑るの水、氷れるなり。銀竹 これ

も垂氷也。羅山子は、雨をいふといへり。李白詩に、白雨映

寒山一森々 似「銀竹」。厚氷 氷の衣、氷花。氷の声

大寒のとき、氷に音あるをいふ也。氷面鏡 氷の鏡に似た

るをいふ。蔵玉抄注に、鈴鹿川にありといふ。所を定ずとも

いふべし。凝鮒 煮凍 霰 孫面(恤) 云ク、霰は雨雪、

相糺るなり。師説二曰、三曾礼。「和名抄」又霰。『爾雅』

(二百二十ウ)に云、霰は氷雪の糺り下る也。和名、美曾礼。

「同抄」霰、霰ともに、和名みそれと訓す。又雹、『和名抄』

に安良礼と訓す。今の俗、霰をあられとし、雹をひやうとい

朗詠集』に、霰をあられと訓す。これより霰をあられとよみ

来れる歟。愚按ずるに、冬降るものを霰といひ、夏降るもの

を雹といふ。雹は補角反、音ほう也。今の俗、訛りてひやう

といふ是なり。霰 「朗詠集」雹 「和名抄」雹は三出。

「陸佃埤雅」○雹は是、霰に似て大なる者也。但、霰は寒く

して、雨、雹は寒からず。霰は晴がたくして、雹は晴易し。

驟雨の如く然り。北方、常にこれに遇。相伝ふ、龍過るとき

は則、雹下る。四時皆あり。謝氏云ク、余、齊・魯にありて、

四五月の間、屢これを見る。必しも冬ならず。しかして、雹

下るの地は、禾麦年を経て生せず。蓋シ、冷氣凝結びて地に

入り、いまだ化せざるのみ。史書に載する所、雹、大サ桃李

の如く、雞子の如く、斧の如くなる者あり。惟、武帝元封中、

雹大サ馬頭の如きもの極れり。『稽神録』に又載ス、楊行自

ラ(二百二十一才)いふ、天祐の初メ、鼓城にありて暑を仏

寺に避ク。忽チ、大声地に震ふを聞く。走りて門外を視れば、

乃チ一雹を見る。その大サ寺楼と等し。地に入ること丈余は

かり、月を経て乃チ消ゆ。その言、誕然に似たれとも、宇宙

の間、恐らくは亦何ぞあらざる所あらん。「五雜組」これら

の説をおもへは、雹は夏たるべし。今、類をこゝに出す。

霰酒 南都の産なり。又霰酒ともいふ。酒中、霰に似たる

糟あり。霰地の錦 石畳の文ある錦をいふかと雪碇いへ

り。表袴の文、窠にあられあり。一石畳をあられといふ。

霰釜 霰餅 此類すべて糺也。季をもたせたらば冬なるべ

し。おもき景物は一句による也。凍 不龜手の葉 「莊子」

寒中手のこゝえざる葉也。凝 つめたき 寒の字を書り。

冴る 寒し 胼 ひえひらくの略。ひらくは痛也。靴 赤

切の略にや。炭 炭焼、売炭翁。炭 ○小野炭○池田

炭○さくら炭○枝炭(二百二十一ウ)○切炭○廻炭○炭斗○

輪炭○炭俵。炭頭 一俵の内の大なる者をいふ。白炭

河州の産、躑躅の古木也。「本朝食鑑」 細炭 これも白炭

なり。獸 炭 晋の羊琇、炭を用て獸の形を作る。「(和漢)

朗詠(集)に、近日那離獸炭辺是也。よもすから人こそ

とはねけたものゝ炭の火のみわか友にして、道長の歌なり。

槽 ほたは火たもつの略也。助炭 冬春地爐を覆ふ具なり。

火縫 置火たつ、炬燵槽。火鉢 ○手爐○手焙○火桶○

懷爐 埋火 蒲団 衾 襜 頭巾 古の積は巾なし。王莽

が頭禿なり。乃ち始めて巾を施す。「蔡邕独斷」 足袋 単皮。

「和名鈔」 踏皮。「太平記」○野人、鹿の皮を以、半靴となす。

これを多鼻といふ。袋踏皮 皮足袋、刺足袋。温石

塩温石(二百二十二オ) 湯婆 銅器に湯を入れて、手足をあ

たゝめる者。綿帽子 綿衣 紙衣 月冴る 鐘さゆる 大

根引 蕪 胡蘿蔔 莖菁 冬菜 莖漬 葱 根深○葱は、ね

ぎ、わけぎ、かりぎ、あさつきと、すべてぎの一字を以称す。

故に「ト文字の名あり。切乾蘿蔔 乾菜 干菜釣、かけ菜。

枯芦 木の葉 木の葉の雨、木の葉衣。朽葉 色むす

ひてても冬なり。枯野 朽野 百濟野と混すべからず。

鷹 鷄 兄鷄 鷄の雄也。雀鷄 雀娶 雀鷄の雄なり。

隼 鶺鴒 鶺鴒 隼の雄也。ぬくめ鳥をなす者、この鶺鴒也と

いふ。鶺鴒 (二百二十一ウ) 小隼なり。角鷹 鶺鴒 か

しこ鳥 鷹の異名。鷹匠 追鳥狩 列卒を以、雉子を追ひ

出し捉る也。又、雉子にも限らず、すべての鳥をもとるべし。

鳥叫 鶺鴒を呼ぶ也。又、狩人の、声をあげて鳥を追音

をもしふ。鶺鴒 偷立鳥 草などにかくれたる鳥の、鷹に

おそれ、窃にたつをいふ。ぬきたつ鳥 鷹にあふて、草

の蔭を飛ぶ鳥なり。をしへ草 鳥ある所を鷹にしらする也。

鷹の鳥をおひ落したる所を落草といふ。その落草の上を、羽

を引てしらするなり。落草 鷹の鳥を追落したるところの

草也。力草 鷹の鳥をとらへ、片足にて草を掴み、飛立せ

ぬ也。ぬくめ鳥 鶺鴒、夕に鳥をとらへ、終夜足をあたゝ

め、あしたにははなちやるとぞ。列卒繩 鹿狩に繩を引、

鹿を追出す也。「藻汐艸」 鷹にも列卒入ること勿論なり。

鴨鷹 鴨をとる鷹なり。鷹犬(二百二十三オ) 狩杖 犬

を牽ものゝ持つ杖也。是、田犬を禁る也。桜の木を用て作る。

長サは、鷹匠の笠の端のたけに切る。犬飼は目の通りにくら

べて切るなり。狩場 真柴鷄 狩人の弓かくしに柴をさす

也。又、木など折かけて廂のやうにして、鳥獸を捕ることゝ

もいへり。又、人の目を見て、鳥の驚きたつゆゑに、柴もて

覆おほひ隠かくるゝ也。よきて、目柴鬚めしばしと書といふ説あり。鴛鴦そとどり

鴛鴦そとどり 夜の衾ふすまに鴛鴦そとどりを画まける也。「八重垣」 鳧かも よく沙石さいしを

食たふ。皆消化かい化す。只、海蛤かいがを食たふて消化かい化せず。糞ふんに随まて出でつ。

白しろ鳧かも ○黒鳧くろかも ○阿伊佐あゐさ ○鈴鳧すずかも ○鷺鳧さぎかも あぢむら 鳧かも 田た、

鷓鴣せとどり 共にあぢかもと訓なズ。『夫木集』(『夫木和歌抄』) 西行

とぢそむる水みづをいかにいとふらんあぢむらわたる諷うた訪まの入海いりうみ。

あぢむらは鷓鴣せとどりのむらだちわたる也。 水鳥みづとり 浮寝鳥うねどり 鶺鴒せとどり

『万葉(集)』に、乳鳥ちちどり、又千鳥ちとどり。○川かちとり○浦千鳥うらちとどり○群千

鳥むらとどり○小夜こよちどり○浜千鳥はまちとどり○磯いそちとり○夕波ゆふなみちどり○友衛ともゑ○千

鳥足むらとどり。(二百一十三ウ) 氷魚ひをい 氷魚ひをいの使つか 山城やましろ・近江おうみ、氷魚

網代あみしろ一ヶ所。其氷魚ひをい、九月より十二月まで貢たまず。〔延喜式〕

氷魚ひをい使つかの事、『大和物語』に見えたり。 柴漬かしつけ 冬月ふゆづき、伏見

の里人さとびと、柴漬かしつけを以もつて、雑小魚ざつせうぎょをとる。柴漬かしつけの法はふ、生柴なましばを枝葉えはつ

らねて伐きること三四尺余、河水かみづの浅あき所にこれを積たむ。高サ

水面すいめんを出でつ。径まはり四五尺。寒気さむけ厳こなる時は、水中みづなか凝こゆ。こゝ

に於おて、雑小魚ざつせうぎょ、柴しばの下したに集ある。則すなはち、網あみを柴しばの四方よこ方に張ひり、

その柴しばをとれば、魚いさなおどろき走はりて網あみに入る。立春はるのけの後のち、水

漸やうやく暖ぬか也。故ゆゑに諸魚あつたま聚あらず。於こゝ是こゝはじめて止とム。 浚取かへどり

嚴寒げんかん中なか、池水いけみづを浚か乾へして諸魚あつたまを取とる。 網代あみしろ 魚いさなを取とる柵さく也。

宇治田上うぢのたがしなとに氷魚ひをいをとらん為ためにうつもの也 夜興引よこひき 冬ふゆの

夜よ、山中やまなかに獸けものを狩かる。犬いぬを引ひゆゑに、獵者あひりの詞ことばによこ引よこひきとい

ふ也。『わくかせ輪』に、狸狩たぬきかりをいふといへり。又、今式いましきに

は、犬いぬを山やまへ入れて鹿かを追おふよし記しせり。 生海鼠なまこ 煎海鼠いりりこ

金海鼠なまこ。鱈たら 鱈たら 鱈たら 鱈たら 牡蠣かき 河豚かふろ 河豚羹かふろ○今の俗、鯨

に作つくは非ひなり。(二百二十四オ) 鯨くじらは鮑あひなり。 西施乳せいしにゅう 「北

山経やまのけ」呉人ごじん、河豚かふろの腹はらを呼よびて西施乳せいしにゅうとす。「詞林広記」 鯨くじら

鯨くじら 勇魚取ゆうぎょと 伊沙那いさな 「万葉」今いまいふ久矢くじや辣しなり。い

しへは、弓ゆみにて射いてとりしとぞ。

注

「日本文学研究」第四十八号、同第五十九号、大東文化大  
学日本文学会、二〇〇九年二月、二〇二〇年二月。